

体操着を忘れた女の子 がパンイチで授業を受け させられる話

某高校の2年B組の生徒たちは、次に始まる4時間目の体育の授業に備えていた。岸本乃愛は教室の後ろの席で読書に耽っていた。長い黒髪が肩に垂れ、内向的で恥ずかしがり屋な彼女は、読書が心の拠り所だった。クラスの喧騒

に溶け込むより、本の世界で静かに過ごすのが好きだったが、この日はそんな平穏が崩れる予感がしていた。朝、母親に「早くしなさい！」と急かされ、慌てて家を出たせいで体操着を忘れてしまったのだ。鞆を開けると、本と筆記用具しかなく、白いシャツと赤い短パンの袋が自室の机の上に置き去りにになっている

姿が脳裏に浮かぶ。思わず「どうしよう…」と呟いた。

チャイムが鳴り、体育教師の山口先生が教室に入ってきた。太い眉と厳つい顔で知られ、生徒たちに緊張を強いる存在だ。「全員、体育館に移動しろ」と低く命令し、乃愛は立ち上がるが、鞆に体操着がない現実、実に膝が震えた。「やだ…見学させてほしい…」と心の中で呟く。原田美月が

「どうしたの？」と心配そうに聞くが、乃愛は「ううん、大丈夫」と小さく答えるしかなかった。体育館に向かう廊下で、彼女は山口先生に近づき、「あの…体操着忘れました」と掠れた声で告げた。先生の眉が吊り上がり、「何？ 見学でもするつもりか？」と怒気を孕んだ声が響く。乃愛の顔が一瞬で真っ赤になり、「ご

めんなさい…」と呟きながら目を伏せた。

「でも、まあ…授業は受けさせる。パンツ一丁でもいいから出てこい。ブラジャーも動きにくいだろうから外せ」と冷たく言い放つ。乃愛の目が泳ぎ、「えっ…!? 先生、それだけは…お願いします！」と訴えるが、「甘えるな。お前が忘れてきたのが悪いんだろう」と一蹴され、逃げ場が消えた。「嫌だ…

こんなの無理…」と心の中で叫び、喉が詰まる。周囲の生徒がざわつき始め、佐藤が「おい、マジかよ」と呟き、田中が「パンツー丁って…やばいだろ」と目を丸くする。高橋は「おお、面白くなってきた」とニヤつき、原田美月は「先生、酷すぎます！ 乃愛が可哀想です！」と声を上げるが、山口先生に睨まれて黙る。美咲は「えっ、乃愛にそん

なことさせるの!? ひどいよ
...」と眉をひそめ、クラス全
体が異様な空気に包まれ
た。

乃愛は体育館の隅に移動
し、震える足で制服を脱ぎ
始めた。「見ないで...お願
い...」と呟きながら、セー
ラー服のスカーフを解き、
ブラウスを脱ぐ。冷たい空
気が素肌に触れ、スカートを
下ろすと、白い綿のパン
ツだけになった。長い黒髪

が背中に流れ、華奢な体が露わに。細い腰と平らな腹部が目立ち、パンツの縁が少し緩く、薄い布が下腹部に軽く食い込む。彼女はブラジャーのホックに手を伸ばし、「こんなの恥ずかしすぎる…」と呟きながら震える指で外そうとする。なかなか外れず、「早くしろ」と山口先生に急かされ、ようやく「カチッ」と音が

響くと、薄い布が肩から滑り落ちた。